

海外レポート

第64回国際歯学研究会に出席して

松田 浩一

東日本学園大学歯学部歯科保存学第Ⅱ講座

今回、第64回国際歯学研究学会(IADR)に出席する機会を本学より与えられましたので御報告致します。

IADRは、会員総数約7,000名を有する歯科全体を包括する研究学会であり、年に1回、総会を開催しています。日本においても、1980年大阪にて、アジアで最初の総会がもたれ、成功裡に終わっています。

此の度、我が国に西洋医学の導入するにあたって指導的役割を演じたオランダのハーグ市で、6月26日～28日の3日間催された。オランダは、6月に入って気温30℃を越す日が続く、ハーグ市の海岸は、海水浴客で賑わっていた。又、東京駅が模倣したといわれるアムステルダム駅の前では、若者が青空コンサートを開いていた。

会場のコンベンションホールには、数千人の会員が参集し、発表演題総数1,166題、シンポジウム8題で、日本人の発表は、日本の研究機関よりの発表が92題、日本人が海外の研究機関に留学し、そこでの外国人との共同研究者としての発表が46題、日本と海外の研究機関との共同発表が9題で、年ごとに日本人の発表数が増加している。因みに、私の研究発表は、ペイラー大学(アメリカ)との共同研究である。

初日の6月26日は、午前中は開会式が行われ、IADR会長Goldharber教授(ハーバード大学)を始め、ハーグ市長等の挨拶があった。

午後には歯科の基礎、臨床にわたる各専門グループに分れて、一般講演(口頭発表、ポスターセッション)が行われた。

私は、Dental Material部門に於いて、演題“Corrosion Characterization of Soldered Joint: Au-Pd and Pd-rich Alloys”を口頭発表を行った。シンポジウムは、保存修復学関係では、“Microleakage of Restorative Dentistry”で、IADRのPulp BiologyとDental Material Groupsの共催で、Dr.Bränström(Karolinska Institute, Sweden)をはじめ、両グループの国際的な基礎、臨床にわたる権威者が参加しての講演、討論は有意義であった。我々歯科医は、う蝕病巣を除去した後、元の硬組織の代替物として人工物で修復するわけであるが、現在のところ、完全な接着が得られないので、微少漏洩に伴う細菌感染等により2次カリエスが惹起されるのでその問題は大変重要である。

2日目は、各分科グループの一般講演とともに、シンポジウム“Oral Health Research Implications of AIDS”, “Dental Facial Ethics: Cross-cultural Perceptions and Treatment Implications”が行われた。前者は、歯学、医学の基礎、臨床の立場から、現代のペストといわれているAIDSに対して不必要に恐れずに、しかし、観血的な処置を必要とする我々歯科医は細心の注意をすべきであることを強調していた。3日目は、午前中に一般講演とシンポジウムが行われた。

3日間を通じて、年々日本人の発表が増加しているだけでなく、活発な討論にも積極的に参加しているのがみられたのが印象的であった。